

再臨のキリストによる 第1福音書

テロス第1

—キリスト教の完成と
終末について—

THE GOSPEL

BY CHRIST OF

THE SECOND COMING No. 1

TELOS No.1

SEIDOU

正道

目次

テロス第1

第1福音書	2
-----------------	---

全体の目次	3
-----------------	---

第1部 宗教の完成と終末について	5
----------------------------	---

第2部 仏教の完成と終末について

第1章 「↑」の典型的宗教	12
-------------------------	----

第2章 「↓」という補償を受けた仏教	14
------------------------------	----

第3章 「仏教の完成」への接近	18
---------------------------	----

第4章 親鸞の「悪人正機説」	21
--------------------------	----

第5章 仏教の完成と終末	24
------------------------	----

第3部 キリスト教の完成と終末について

第1章 教会による「↓」の徹底	28
---------------------------	----

(1) イエスの立ち位置	29
------------------------	----

(2) 教会の時代	32
---------------------	----

(3) 第二のキリストを生まないために	34
-------------------------------	----

(4) ついに徹底された「↓」のベクトル	39
--------------------------------	----

テロス第1

第1福音書

再臨のキリストによる

第1福音書

テロス第1

——キリスト教の完成と終末について

ギリシア語にテロスという言葉がある。目的、終焉、完成を意味する。キリスト教においては、この世の終わりは歴史の目的であり、終焉であり、完成であるのだ。

佐藤優『新約聖書』解説より

全体の目次

テロス第1

キリスト教の完成と終末について

第一部

宗教の完成と終末について

第二部

仏教の完成と終末について

第1章

「↑」の典型的宗教

第2章

「↓」という補償を受けた仏教

第3章

「仏教の完成」への接近

第4章

親鸞の「悪人正機説」

第5章

仏教の完成と終末

第三部

キリスト教の完成と終末について

第1章

教会による「↓」の徹底

第2章

グノーシス主義という「↑」

第3章

錬金術という「↑」

第4章

パラクレートという「↑」

第5章

ユングという「↑」

第6章

ユングという「洗礼者」

第7章

七つの巻物

第1部 宗教の完成と終末について

宗教の完成について

宗教とは、煎じ詰めれば、神と人間との関わりについて語ったものである。そこでは、神と人間が、霊性を媒介にして浸透しあうことになる。また、どれだけの程度、浸透し合えるのかについて、議論が尽くされている。

そして、ある二者の浸透度が、もっとも高まった状態が“互いが、それそのものになる”事であることは、疑いを容れない。つまり神と人間の場合「神が人間になること」「人間が神になること」こそ、最も両者の浸透度が高まった状態だと言えるだろう。

それはまた、宗教の意義が、それ以上ないところまで行き着いた姿であり、その先がないという意味で、宗教の完成を意味するものである。

ギリシア語に、目的、終末、完成を意味する「テロス」という言葉がある。ということは、上記の「神が人間になること」「人間が神になること」は、まさに宗教にとっての「テロス」なのである。

神の人間化、人間の神化

宗教が完成している状態である「神＝人間」と「人間＝神」は、当然のことながら、同一のものを示している。しかし、その完成するまでの過程においては、私はどうしても「そこに、ある二種類のベクトルが発生する」と言わざるを得ない。

説明するまでもないかもしれないが、ベクトルとは「向かう方向と勢い」とか「大きさと向きをもった量」などと説明される言葉である。このことを確認した上で、では、あらためて言おう。上述の「二種類のベクトルとは何か」について。

それは、神が人間になっていく過程である「神の人間化」と、人間が神になっていく過程である「人間の神化」である。

この二つは、ストップモーションで並べれば——位置が特定されるだけなので——同じものであるが、モーション（動き）を持つベクトルとして見れば、決して同一のものではない。

そしてまた、私たちの通念どおりに、「神は上にあり、人間は下にある」とすれば、「神の人間化」は下に向かったベクトルとなり、記号化すれば「↓」になる。逆に「人間の神化」の場合は上に向かったベクトルとなり、記号化すれば「↑」になるだろう。

現実化するベクトル

これら二つのベクトルは、宗教のスタイルとしてリアライズ（現実化）する。

まず「↓」は、現実の宗教としては“救済型宗教”となる。すなわち「神からの恩寵が、下方にいる人間たちに降りてくる」という形式の宗教だ。

この形式を満たすため、神はあえて、人間として生まれてくる事すらある。それがキリスト教で言うところの「受肉」である。人間を救済するために、文字通りの「神の人間化」が行われるということだ。

したがって、救済型宗教においては、人間側は「神に近づくための努力をせよ」と命じられることはない。人に求められるのは、ひたすらに神を信じ、己の無力さを露わにすること。そして、神の恵みの前に、心身を投げ出すことだけだ。

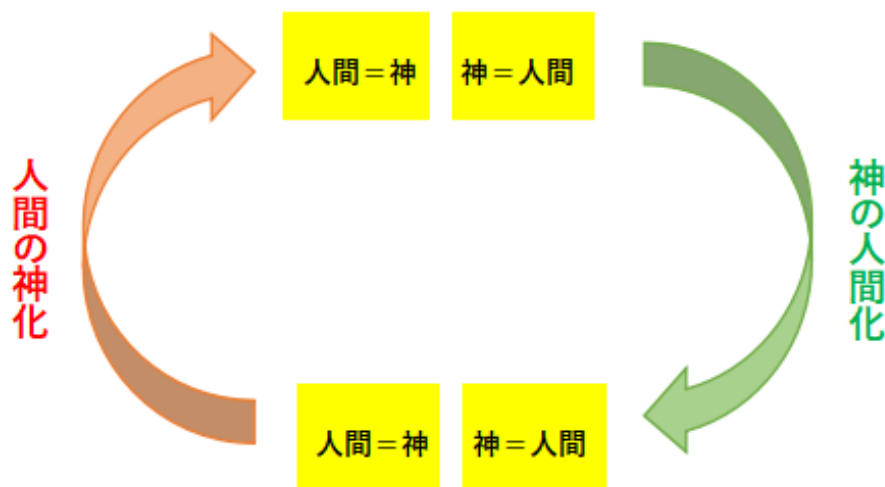
逆に「↑」は、現実の宗教としては“認識型宗教”となる。この認識とは霊的認識のことであり、平たく言ってしまうと「悟り」のことである。

この認識型の宗教に集う人たちは、霊的知識と霊現象によって悟りを高めていって、自身の意識をどこまでも上昇させようとする。そうやって上昇させることによって、神へと近づくわけだ。

そのためには当然、不斷の努力や修行が必要となる。よって、もし「神からの恩寵を待っている時間」などというものがあるなら、彼らはその時間を、すべて自己修養のために使うことだろう。

「＝」という完成形

もっとも、「↓」であれ、「↑」であれ、その行きつく先、最終的な完成形は、いずれも「神＝人間、人間＝神」の状態である。ごく単純な記号として表せば、「↓」と「↑」の双方ともが、結局は「＝」の状態を、自身のゴールにするということである。



2022-05-18 (2) .png

だがそれだけではない。この「＝」は、「↓」や「↑」が、その進展の過程にある間も、その完成理念として、各々のベクトルに、一種の「目的論的な影響」を与えることになる。つまり、ある種の影響力を用いて、「↓」と「↑」を、ともに「＝」である自身に接近させるのである。

補償のメカニズム

少しわかりづらいかもしれないが、これは、ユング派の深層心理学における、「一面化した意識に対し、心の深層から“意識とは反対の構え”が昇ってきて働きかける」という補償のメカニズムと同じことである。かかる補償の目的は、彼の心を完成に導くことだ。ユング派の心理学者であるマイヤーは、次のように言っている。

——あらゆる一面性は、遅かれ早かれ無意識の方から、一面性に逆らう抵抗として現れてくる補償を求める。補償は〔それを受けた者を〕正常な範囲の中へとどめることが出来る——

C・A・マイヤー『ユング心理学概説1・無意識の現れ』河合俊雄・森谷寛之訳より

要するに「補償」とは、ある偏向を補って、全体的なバランスを回復することを意味しているのである。擬人的に言うと、「＝」にとっては、「↓」と「↑」のどちらもが立派な偏向なので、何としても、そのまま放置しておく訳にはいかないということだ。

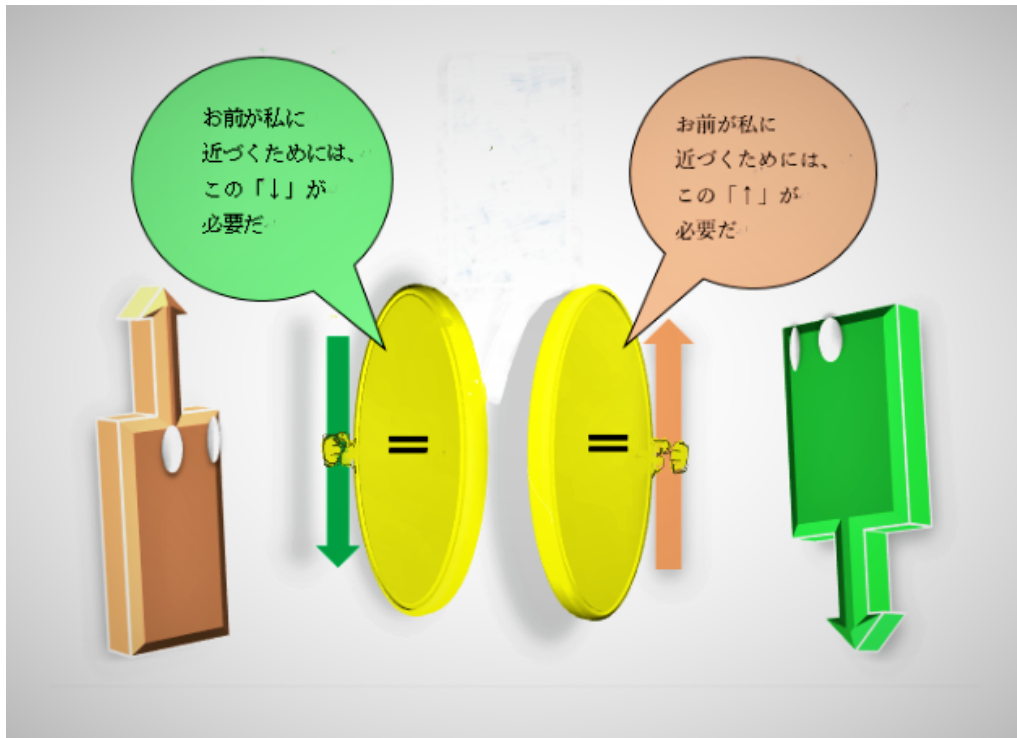
したがって、「↓」には、その補償として「↑」が働きかける。

逆に「↑」には、その補償として「↓」が働きかける。

その働きかけは、言わば、「偏向を補償せよ」という、「＝」親分（心の完成理念）からの密命を受けて現れたものである。そのような「正反対の補償」を受ければ、どちらのベクトルも「＝」に近づくことが出来るからだ。

「さあ、接近の材料（補償）は与えたぞ。お前たちは、それを使って私のところまで近づいてこい」

と「＝」親分は、偏向した「↓」と「↑」に、つねに語りかけているのである。



2022-05-23.png

二通りの「完成と終末」

ただし、あるベクトルが進展している途中で、そのような補償作用が働くと——たしかにバランスが整って、宗教としての完成度は上がるのであるが——ベクトルとしては、方向性が相殺されて力が衰える、ということが起こる。

その衰弱の帰結としての、宗教史からの消失。これも一つの「完成と終末」の形ではある。けれどもそれは、およそドラマティックであるのとは、まったく正反対の意味における「完成と終末」であろう。

それに対して、補償作用を意識化できなかったり、補償作用を意図的に拒否したケースも存在する。こうした場合、その宗教は、内容的には、一面化することを免れない。換言すれば、その宗教は、ひどく偏った考えを持つようになる。

しかし同時に、その宗教は、未完成状態として、ベクトルとしての強さを保持することが出来る。およそ未完成であることが、若さや活気と密接であるように。

とはいえ、その一面化は「偏執、歪み、醜さ、罪過」とも容易に結びつく。そして、そうしたマイナス要因によって、その宗教に属する人たちに、多くのストレスを投げかけることになる。

そして、そのストレスのゆえにこそ、一面化した宗教は、そこに属する人々に「補償による平衡」を渴仰させることになるのだ。

そうなるのも当然だろう。誰だって、苦しみからは逃れたいからだ。たとえ、その苦しみは“無意識的なもの”であったとしても。

大規模な転換

そのため、このケースにおいて生じる補償は、きわめて性急にしてドラマティックなものになる。かつまた、とても大きな変化をもたらすことになる。

というのも、極端に一面化している意識にとっては、いかなる変化も、きわめて大規模な転換であるからだ。たとえ、それが自然の摂理に則った“順当な変化”であったとしてもである。

試みに、そのときの状況をザッと描いてみよう。

まず一方に、意識的な「すでに慣習化している未完成状態を、まだ続けていたい」という気持ちがある。そしてもう一方に、深層意識から湧き上がってくる「いち早く、その未完成状態から逃れよう」という気持ちがある。

やがて、これら二つが対峙しあい、激しい緊張状態をつくり出す。そうして両者による、血みどろの戦いが始まる。

しかし、機が熟していれば、結局その戦いを主導することになるのは、深層意識のほうである。つまり補償作用のほうが、優勢とならざるを得ない。

それというのも、従来からのものには「倦み」や「飽き」が含まれているけれども、補償作用には、その反対に「新鮮さ」が加わっているからだ。人々は、最終的には、古いものよりも新しいものを選ぶものである。

こうして生じるのが、宗教が自身の目的としていた「＝」の状態である。

これこそまさに、ドラマティックな「宗教の完成」であり、また「宗教の終末」である。そして、これを悲劇と思うか、幸福と思うかは、一にかかって、我々の感性の問題なのである。

第2部 仏教の完成と終末について

第1章 「↑」の典型的宗教

具体的な宗教名

第一部においては、宗教の完成と終末に関して、つとめて簡明で抽象的な論述を試みた。しかし、この第二部以降では、それとは逆に、より具体的な論述スタイルによって、しかし内容については「第一部と全く同じこと」を語ってみたいと思う。

そして、そのように具体的に語るならば、第一部でただ「宗教」と呼んだものにも、また具象的な名前を与えなければならない。

むろん、最終的には、それは「キリスト教」になるだろう。なにしろ本書のサブ・タイトルが『キリスト教の完成と終末』なのだから。これが本書の心臓部たる「第三部」となる。

だがその前に、仏教の完成と終末について「第二部」として触れておきたい。

なぜなら仏教こそは「↑」の典型的な宗教であり、これを予め語っておけば、そのコントラストによって、キリスト教の「↓」の内容を、より鮮明に浮き上がらせてくれるはずだからである。

仏教は佛教

仏教の仏という文字は、旧字だと「佛」と書く。そして弗というのは「無」のことである。

ただし、この無は決して、虚しいだけの「虚無」のことではない。むしろ、どんな名前も付けられ無い、どのようにも特定でき無い、そうした究極の全体性を意味していると言えよう。つまり無とは、存在そのもの、神的なる存在そのもの、ということなのだ。

その無に人べんが付いて「佛」になる訳だが、人べんとは、そのまま「人」のことである。したがって「佛」という文字は、それ自体が「人間と神的なものの合体」を意味しているのである。人間と神が、完全に浸透し合っていると言ってもよい。

しかも、字体が「佛」から「仏」に変わっても、未だに人べんが健在であること。すなわち、神的なものが、今もって「かつて自分が人間であったこと」を忘れていないことが素晴らしい。

つまり仏教にあっては、その発祥から現代に至るまで「神は、人間と隔絶した存在ではない」のである。言いかえれば仏教は、その歴史を一貫して「人間は神になることが出来る」と主張しているのだ。なんとと言っても、その「神になった人間」こそが「仏」に他ならないのだから。

そうして仏になるために、僧は不断の修行を行うことになる。

要するに仏教とは、人間が修行によって悟り、その悟りの上昇力によって、神的なものに近づいてゆく「人間の神化」を具現化した宗教なのである。

悟りと救済

とくに原始仏教は「悟りの宗教」そのものだったと言えるだろう。

その頃の仏教徒たちは、かならず出家してから修行に入った。出家とは、家庭や俗世間を離れることを言う。仏教徒たちは、そのように極めて禁欲的な環境のなかで、悟ろうとしたのである。彼らはそれによって、開祖である仏陀に近づこうとした。

もちろんゴータマ（釈迦）自身もまた、出家して修行した人間の一人である。ゴータマはその出家の成果としての悟りを得て、ついに仏陀となったのである。

このようなスタイルの仏教は、のちにタイやミャンマー、スリランカなどに伝わった。それらの国々では、現代においても、その古の修行の原型を、かなり色濃く留めている。そして、これをもって南伝仏教と呼ぶことがある。

しかし、インド、中国、日本へと伝播された北伝仏教には、明確に「＝」というエンテレケイアからの補償が働いた。つまり原始仏教の「↑」が、「＝」に近づくために「↓」の影響を受けたということだ。

第2章 「↓」という補償を受けた仏教

大乘仏教の成立

「↓」の影響——その第一の波は、インドにおける大乘仏教の成立であった。それには、伝説的な名僧である竜樹菩薩（ナーガールジュナ）の働きに負うところが多い。

とはいえ、すでに竜樹以前にも、無名の僧たちによって、「出家した修行者だけが、悟りによって救われる（仏に近づく）というのは、仏の願いとしては、ちょっと了見が狭いのではないか」

という疑問が呈されていた。その疑問に答えを出すために、いくつもの大乘経典が作られた形だ。

大乘の教えとは、要するに、出家をしていない在家信者（世俗の家庭人）にも乗車を許す「大きな乗り物」のことである。換言すれば、出家者が在家信者に向かって「僧である私たちと一緒に、君たちもまた、仏のもとに行こう」と呼びかける、寛容な救済の教えなのである。

そこでは「在家信者では、厳しい修行にも戒律にも耐えられまい」という考えが前提となっている。これは確かに、事実在即していることだろう。

とはいえ、そもそも在家信者たちとは、出家者たちが捨てた「家」を守ってくれていた人たちのことである。そして彼らが、その家（＝家庭と俗生活）を営むためには、ある意味、遊興も破戒も、せざるを得なかったのである。

こうした「俗世にまみれた在家信者」を救うためには、どうしてもプロの修行者、すなわち悟りたる者たちの助力が必要だった。そのため、ここでは、「すでに高みにある者たちが、世俗の次元に降りてくる」

という「↓」のベクトルが発生せざるを得ない。こうして、その「↓」が、原始仏教の「↑」を、最初に補償するものとなったのである。

天台宗における「久遠実成の仏陀」

仏教は、インドから中国へと伝播していく。その中国仏教では、浄土宗と天台宗が名高い。

まず、天台宗のほうは、大乘経典の『法華経』を中心においた宗派である。

一般に「↓」のベクトルが働くと、「多くの迷える民衆を救済するのだから、そこにはどうしても巨大な力が必要になる」

といった“強大性”の要請が生じる。これによって神的なもの（ここでは仏）は、いきおい超人的、超越的なものになる。その意味では『法華経』における「久遠実成の仏陀」などは、まさにその超人超越の典型例であろう。

もともとゴータマ・ブッダ（仏陀）は、インドのカピラヴァストゥに生まれて、35歳で悟りを開いた実在の人物である。

しかし、久遠実成の仏陀は、そのゴータマとは、かなり性質が異なっている。すなわち、久遠実成の仏陀とは、ゴータマの见えない実相（背景にある本質）に他ならないのだ。

それは霊界において、ゴータマの実相として、永遠に鎮座している存在である。言うなれば「久遠の過去から悟りを開いている恒常不変の仏」なのである。

それは仏と言っても、つまり人べんが付いても、生まれもしなければ死にもしない。悩みもしなければ弱りもしない。そうした、ただただ巨大な「救済のための霊的エネルギー」である。それこそ「強大性の権化」とするしかないものである。

いちおう仏教徒として仏陀を崇めているとはいえ、天台宗の本尊は、もはや人間としてのゴータマではなく、こちらの久遠仏になっている。そこでは、この強大なる久遠仏によって、すべての信徒の救済が約束されている。これをして法華一乗という。

浄土宗の阿弥陀仏

浄土宗における阿弥陀如来も同様である。

もともと大乘仏教徒の文学的創作によって生まれた阿弥陀仏は、別名を「無量寿仏、無量光仏」という。ゆえに彼は、永遠（無量寿）と無限（無量光）の体现者であると言ってよいだろう。しかし、この超越的な阿弥陀仏は言う。

「けれども私は、苦しんでいる人々が全て救われないかぎり、本当の意味における“仏”には、決してなりません。仏になる前の段階に留まりましょう」

このように阿弥陀仏は、非常に自己犠牲的な誓いを立てている。

つまり阿弥陀仏の慈しみは、自分を犠牲にしてまでも、衆生の苦しみに向かって、どこまでも伸びていくのである。これもまた、上から下へと向かっていく恵みであり、まさしく「↓」の具象的展開だと言えるだろう。

この阿弥陀仏の「↓」に対して、人間の側の「↑」は、ほとんど何も要求されない。浄土宗の信徒たちは、ただ阿弥陀仏からの救いを信じて待てばよい。そして、その「信じていること」を、サインを送るように、阿弥陀仏に知らせればよいのだ。

そのサインこそが「南無阿弥陀仏」という念仏であり、このあたりの事情を、中国の善導という高僧は、

「口に念仏を唱えれば、極楽に迎え入れられる。それは阿弥陀仏の誓いによって決定している」という言葉で表現している。

善導とヨハネの共通性

こうなると浄土教は、分類上では仏教に属していても、その実、キリスト教の「信じれば救われる」信仰スタイルと、ほとんど言っていることが変わらなくなってしまう。たとえば『ヨハネによる福音書』には、次のようなくだりがある。

——「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」

と言うと、イエスは答えて言われた。

「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である」——

かくのごとく、善導が言っていることと、ヨハネが言っていることは、ほぼ同じなのである。つまり原始仏教の「↑」に対して、それほどにも、補償の「↓」の波及が進んだということだ。

むしろ中国における状況は、仏教が仏教たりうるため、逆にそこに「↑」の再付加を必要とするほどだった。

それを担うのが、達磨大師から始まる「禅」の流れである。座禅を組んで精神集中を行う姿は、まさに原始仏教の「↑」的な修行スタイルを彷彿とさせる。

日本の仏教

飛鳥時代、蘇我馬子や聖徳太子による「朝鮮半島からの仏教受容」によって、日本の仏教が本格的に始まる。

ただし、その仏教は長らく、一部の宗教的エリートのものであった。そのため奈良仏教の頃までは、かなり「↑」の色合いが濃い。宗教的雰囲気としては、おそらく南伝仏教のそれに似ていたのではないだろうか。

しかし、平城京における奈良仏教界は、政治的にも大きな力を持つようになった。この政治的影響力を排したいと願う桓武天皇。彼によって、平安京への遷都（都の移転）が執り行われる。

つまり桓武天皇は、奈良仏教を、旧都平城京に置き去りにしようとしたわけだ。

かくして新しい都である平安京で花開いたのが、最澄による天台宗と、空海による真言宗だった。二人とも中国に渡り、そこから「奈良仏教とは異質の仏教」を持って帰ってきた。

最澄と空海

最澄が持って帰った天台宗は、中国仏教の項で述べたように、『法華経』を根本經典とする宗派である。すなわち、法華一乗による万民救済を謳う、濃厚な「↓」タイプの宗教だ。そのため必然的に、奈良仏教の「↑」との間に、論争が引き起こされた。

とはいえ、もともと「↑」を基調にして成立したのが仏教なのだ。ゆえに、その正統性を論じるにあたって、最澄が徳一（奈良仏教代表）を論破することなど、出来るはず

もなかった。この敗戦により最澄は心身ともに衰弱していく。

しかし皮肉にも、心労のすえに最澄が亡くなると、その直後に、天台宗の社会的地位が定まることになる。そして、その本拠地である比叡山延暦寺は、その後の日本仏教における「↓」の発展の本拠地ともなった。

一方の空海は、中国から密教を持って帰ってきた。密教の内容は、かなり神秘主義的なものだが、「↓」の代表的宗教であるキリスト教もまた、神秘主義的である。

さらに中国において「浄土宗が廃れたかわりに密教が盛んになった」という継承の歴史があったことを鑑みれば、そこに「↓」の伝統が息づいていることが分かるだろう。

また空海は、景教（中国に伝わったキリスト教）の影響も受けている。なにしろ、中国で洗礼を受けた上に「遍照金剛」という洗礼名まで与えられているのだ。

既述したように、キリスト教は「↓」の代名詞のような宗教である。したがって、空海が日本に持ち帰った「↓」には、かなり高純度なベクトルが込められている、と言えるかもしれない。

第3章 「仏教の完成」への接近

鎌倉仏教の浄土門

平安仏教（最澄、空海）の次は、鎌倉仏教だ。最澄が開いた比叡山は、この次世代の仏教が花開くための土壌となった。この霊場から、源信や法然、栄西や道元、親鸞や日蓮などが、次々に排出されていった。

その中でも、特段に「↓」のベクトルを担っているのが、源信、法然、親鸞、という浄土門系の流れであろう。よって本章では、彼らの姿をクローズアップして眺めていきたい。

浄土宗という「落ちていくボール」

源信、法然、親鸞——まず最初に言っておかなければならないのが、この三人が、いずれも高德の宗教的エリートだったことだ。

具体的な論述に入るまえに、読者にあっては、どうか「高い棚の上にあるボール」を想像していただきたい。

そして、その位置エネルギー（高さ）に満たされているボールが、下に落ちていくことによって運動エネルギーに変換される、と。

そうして最終的には、ボールが床に着地することによって「振動」という影響を床面に与える、という状況を思い浮かべてほしいのだ。

源信、法然、親鸞、という高德（＝高さ）の宗教的エリートたちも、それと同じと言える。すなわち彼らは、「↓」というベクトルに身を捧げることによって、その位置エネルギーを、運動エネルギーに転換させてゆくのだ。そして最終的には、床（教えの聴き手）を振動させることになる。

ただし、その「床」にあたる着地点が——源信よりは法然、法然よりは親鸞、という形で——しだいに低くなっていく。そうして、その低くなった分だけ「ボールが落ちるまでの距離」が伸びることになる。

当然、落ちるまでの距離が長いほうが、ボールのバウンド（＝床の振動）も大きくなる。つまり「↓」としての影響力が大きくなるという訳だ。

さほど落ちない源信

トップランナーである源信などは「それほど落ちない」。なにしろ彼は、

「悟りに近く、瞑想修行が出来るというならば、その人は、難しい修行をこそ行うべきだ」というスタンスさえ持っているからだ。

これは浄土門の聖典、『観無量寿経』の立場でもある。この『観無量寿経』に出てくる仏陀は、修行の及ばない人間に対してのみ、次のように言う。

「仏陀を心に念ずる修行が出来ないなら、せめて『無量寿仏（阿弥陀仏）』の名前をとる方がいい。純粋な気持ちで、声をとぎらせることなく、となえつづけるのだ。仏陀を念じつづけながら『南無阿弥陀仏』と、十回くり返して、思いをのべるのだ」

このように仏陀は、未熟な者たちを前にして「阿弥陀仏の名前を称える形での念仏を行うがいい」と教える。このような念仏を称名念仏という。

しかし、かかる称名念仏は、観無量寿経の仏陀にとっては、飽くまでも「仕方なし」に行うべきことである。けっして仏教徒本来の行為ではない。もちろんそれは、源信にとっても同様だった。だから彼が、

「難しい教えを受け入れられない民衆たちよ。でも大丈夫、お前たちは『南無阿弥陀仏』という念仏を唱えるだけでもいいのだ」

と言ったのも、なかば便宜上のことだったのだろう。すなわち、
「そんなもので、私のような“高德な境涯”に至れるはずもない。だが、全く救われないよりは、少しでも救われたほうがいいだろう」

というような。そんな風に考えている源信であれば、図式的には「彼自身は、はるかな高みに立っていて、そこから民衆を、ずっと下に眺めている」と形容せざるを得ないだろう。

法然の専修念仏

それが第二走者である法然になると、念仏を唱えること（＝口称念仏）は、もはや便法などではなく「それ自体が、絶対の価値を持っているもの」として認識されるようになる。それだから法然は「専修念仏」ということを提唱したのだ。

専修念仏とは「念仏を唱える以外の修行はしないし、またその必要もない」という教えである。なぜ念仏を唱えるだけでいいのかと言えば、それだけで阿弥陀仏が救いに来てくれるからだ。それを「中国の浄土教徒である善導が保証してくれている」と法然は言う。

すなわち、すでに第2章で触れてある、
「口に念仏を唱えれば、極楽に迎え入れられる。それは阿弥陀仏の本願（誓い）によって決定している」という言葉がそれだ。たしかに『観無量寿経』にも、
「仏陀の名（＝念仏）をとる効果によって、彼は、くり返しとなえるたびに、ふつうなら八十億劫もの長い間、生と死をくり返さなくてはならない運命に彼を巻きこむ罪を、すべて消してしまえるだろう。（中略）彼は、最高の浄福の世界である『極楽浄土』に再生するであろう」

とある。たしかに、この文章をことさら強調して解釈すれば、浄土教においては、もはや念仏を唱える以外の修行は、何ら必要ないことになる。しかも、念仏を唱えるだけ

ならば誰にだって出来る。たとえ無学文盲の世界を生きる民衆であってもだ。

実際、この教えが、どんなに民衆を喜ばせたか分からない。一般的な仏道修行に耐えられない人々にとって、これほど簡単でありがたい教えはなかっただろうから。

そのため、京の都でも浄土宗のブームが巻き起こり、さながら民衆は、歓呼に「振動した」と言っている。

ただし、その“教え”は民衆の次元に降りた（落ちた）ものの、法然その人は、死ぬまで「宗教的エリート」の高い次元に留まった。彼は僧としての戒めを固く守り、亡くなるまで、ずっと清らかな独身を貫いたのだった。

第4章 親鸞の「悪人正機説」

親鸞という着地点

法然は、上述したように「徳高き宗教的エリート」の立場に留まった。

ところが、そんな清らかな法然に対し、それこそ泥まみれになってまで、心身もろとも「民衆の次元」まで降りてきた僧侶がいた。

この降下した僧侶は「人間の愚かしさ」「罪人としての人間」という地平に着地した。それが法然の愛弟子である親鸞だった。

親鸞が説いた教え自体は、法然の専修念仏と変わらない。しかし彼は、徳高き宗教的エリートの立場をかなぐり捨て、正々堂々と破戒僧となった。戒めを破り、妻帯し、もはや僧であること自体を、こだわらないことにした。

——というより彼は罪人であり、俗人からも排除されている。僧であることもできず、俗であることも出来ない。そこで彼は「禿」の字をもって姓となすことをお上に願い出た。

「禿」というのはザンバラ髪の人間であり、それは治外の民である。

いってみれば、それは人間視されない人間の仲間、現在でいえばヤクザの仲間である。それを自分の姓にしてくれと官に申し出たというのである。

しかもその上に「愚」をつけるという奇妙な姓を自分でつくって、それを名のる許可を求めたというのである——

梅原猛『親鸞の告白』より

つまり、この愚禿親鸞は、いまや下層民衆のただ中にいるのである。かつての高僧、宗教的エリートは、「↓」のベクトルに乗って、ついに俗界の、罪人たちの次元にまで、降下したことになる。

罪人としての意識

愚禿たる親鸞は、自分の仲間である民衆とともに、己の愚かしさと、罪の意識に歯噛みする。とくに彼の中で、破戒の後ろめたさは、いかばかりだっただろう。

だが親鸞は、ついに、そこで自己の救いについての答えを見いだす。彼は言う。「高德であることを誇る善人は、自分で自分のことを救えばよい。彼には、その自己救済の力もあるだろう。

しかし、かの阿弥陀仏は『己の罪に悩む、わずかな自信もない者』『悪人であることを自認せざるを得ない、力尽きた者』のほうに、より強く、憐れみを感じるはずだ。

なにしろ、そのような悪人にあっては、どうあがいても、自分で自分を救うことが出来ないのだから。彼のような悪人を救えるものがあるとすれば、それはもはや、仏が恵む超自然力しかないのだから。

よって、誰より慈しみ深い阿弥陀仏は、まず率先して悪人を救おうとするだろう。まことに、そうせずにはいられないだろう。自分（阿弥陀仏）がどうかしてあげなければ、悪人にはもはや、何ひとつとして救いの手立てがないのであるから。

そして、もし実際の『救済の機構』が、このようなものとすればだ。阿弥陀仏を前にしたとき、より救いに近いところにいるのは『善人よりも、むしろ悪人のほう』なのではないだろうか。ひとつの理として、そういう事にならないだろうか

このような逆説的な救済の理論こそが、親鸞の思想として有名な「悪人正機説」である。

ベクトルの補償の完了

悪人正機説——それは、罪を犯さずにはいられない、しかも無力な下層民衆たちの地平でこそ、真実味をもって響きわたる教えであった。

この親鸞の教えの正しさを裏書きするように、イエス・キリストも、「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである（マタイ）」

と言っている。ここまでくると、まるでイエスが、阿弥陀仏の気持ちを代弁しているようだ。親鸞が実際に、このイエスの言葉を聞いたなら、嬉しくて、涙が止まらなかったのではあるまいか。もしかしたら親鸞は、イエス・キリストを前にしえたなら、彼を「阿弥陀仏」と呼んだかもしれない。

つまり親鸞は、ついに仏教の「↑」とは逆のベクトルである「↓」の最果てで、キリスト教的な救済観を見いだしたのである。

これこそまさに、仏教の「↑」に対する「↓」の補償の完了であった。

悪人正機説に内在する「↑」

もっとも「悪人正機説」それ自体は、純粋な「↓」の結晶とは言えない。そこには、わずかながら「↑」の要素が混じっている。なぜなら、悪人正機説を標榜して生きようとするならば、その人には、どうしても「自分自身を罪人だと認められるような内省性」が不可欠となるからだ。

このような内省性は、実を言えば、立派な「悟りの果実」である。明らかに「↑」的なものであり、ある程度まで、人間が神化しないかぎり得られないものである。

まことに皮肉な話ながら、悪人正機説とは、実は、そのように「ある程度悟って初め

て発動する、救済の教え」なのである。

これをもっと人間的に言い表せば「悟った目で自己の心奥を見つめ、そこに罪を認め、その罪を悔い苦しんで始めて、人は、阿弥陀仏の救いを求めることが出来る」ということだ。

ところが実際には、このような内省性（悟り）を、下層民衆のほとんどは、全く持っていなかった。これは当然と言えば当然のことであろうし、彼ら民衆たちの実態は、むしろ、それとは全くの逆のものだったのだ。

すなわち彼らは、決して、自分たちの罪を自覚することがなかった。それどころか彼らは、そのように自己の罪に無自覚なまま、さらに新しい罪を、日々そこに増し加えていったのである。そうした厚顔無恥ぶりが、下層民衆たちの倫理的な実態だった。

悪用された悪人正機説

それだから彼らは、なかば意図的に「悪人正機説」を誤解して悪用したのである。あるいは、その教えを、自分たちの悪事を正当化するために利用したのである。すなわち彼らは、悪人正機説をして、

「どんな悪いことをしても、念仏を唱えさえすれば、阿弥陀仏が救ってくれる」

「より大きな悪事を犯したほうが、阿弥陀仏は優先して救ってくださる」

といった、もはや卑怯と言ってもいい教えとして解釈したのだ。

彼らにとって悪人正機説は、自分を甘やかすのに都合のいい、実に“ありがたい”教えだった。もちろん、こんなにも卑怯な教えを奉じれば、人間は、徹底的に墮落するほかはないのであるが。

確かにひどい話だが、ある意味で、それも仕方がないのかもしれない。なにしろ、おそらくは親鸞自身が「悪人正機説のなかに『↑』の要素があること」に気づけなかったのだから。つまりは、教えを説いた、当の親鸞自身までもが、この重大問題に対して無自覚だったのである。

であれば、そんな親鸞の説教を聞いた民衆が「悪人正機説」を曲解したとしても、これを無下に責められるものではない。むしろ、彼らにとっては、致し方ないことだったと言うべきだろう。

第5章 仏教の完成と終末

仏教の完成

ともあれ、親鸞による悪人正機説は、仏教に対する補償完了を表すシンボルだった。

もともと「人間の神化」「↑」を基調にして出現したのが、かの原始仏教である。その原始仏教に対して、大乘仏教・浄土宗は「神の人間化」「↓」というベクトルを補った。そして親鸞の「悪人正機説」によって、その補償が、ついに完遂されたのである。

それはイエスの受肉のように、一人の宗教家によって成し遂げられたものではなかった。何人もの大乘仏教の僧侶によってリレーされ、徐々に遂行されていったものだった。

より厳密に言えば、親鸞のあともリレーは続く。親鸞の教えを押し広げる役割を担った、蓮如という浄土真宗の僧が出現してくるからだ。なお浄土真宗とは、親鸞を開祖とする浄土宗の宗派のことである。

むろん、仏教が仏教である限りは「↑」の伝統も消えない。栄西による臨済宗や、道元による曹洞宗などは、禅によって、鎌倉仏教に「↑」のベクトルを再付加している。

とはいえ、二つのベクトルは、親鸞の出現をもって、ほとんど相殺され切ってしまった。仏教は、結果的に、宗教としての役割を果たし切ってしまった。つまり仏教は、歴史的に完成の時を迎えたのである。

仏教の終末の相

これには、親鸞が始めた「肉食、妻帯」という破戒が、彼の浄土真宗に留まらず、すべての宗派に波及したことが大きいだろう。禅宗ですらそうであり、もはや僧が「悟りを求めてストイックに生きること」自体が難しくなってしまった。

現代ともなれば、職業人としての僧侶はいても、宗教家としての僧侶はいないのかもしれない。そこまで言わなくとも、

「鎌倉仏教以降、日本の仏教界からは、高僧が輩出されなくなった」

とは、よく言われるところである。それが真実であると断言する勇気はないが、日本仏教の魅力が色褪せつつあるのは、誰も認めざるを得ないところだろう。

かくして仏教は、静かに衰亡の道を辿っているように見える。淡く儚い黄昏を迎えようとしているように見える。きっとこれが仏教の「完成と終末」なのだろう。

振り返ってみれば仏教は、インドではヒンズー教に呑み込まれ、中国や朝鮮では、儒教にすげ替えられて、すっかり弱体化してしまった。そして日本では、上記のような形で生命力を失っている。こうした宗教的情勢をして「末法の世」と言うのだと思う。

寛容だった仏教

少し寂しい気がしないでもないが、仏教がこのように静かな「完成と終末」を迎えられたのは、その宗教性が極めて寛容なものだったからこそである。どう見ても異端にしか見えない教説であっても、それを「仏教」として受容してしまうほどにも。

率直に言ってしまうと、法然や親鸞の教えなど、原始仏教からすれば、もはや仏教でも何でも無い。仏教内の宗派というよりは、明らかに別種の宗教である。それでも仏教の「↑」は、自己の完成を目指して、この「↓」をも吸収していった。

もちろん他方には、あえて「↓」を吸収しなかった南伝仏教のような流れもある。それは確かに、原始仏教の原型を留めている。

だが、かかる南伝仏教史の中には、きっと救いから取り残されてしまった、悩める民衆の姿が、数多くあったに違いない。その変化に乏しい、狭い“救いの戸口”しか持たなかった、小乗仏教的な伝統の中には、である。

音楽家ではあるが「伝統とは墮落である」と喝破した人がある（マーラー）。

要するに彼は「伝統とは歴史的無変化のことであり、変化しないことは怠慢であり、それ即ち墮落である」と言っている訳だ。若干不遜な気もするが、それでもこれは、かなり真実を突いている言葉ではないだろうか。

したがって、伝統を伝統のままにできなかった、北伝仏教の流れは、否定されるべきではない。インド、中国、日本と伝播していった仏教の変化は、決して墮落の歴史ではないのである。私たちは、北伝仏教が見せた「仏教の寛容性」に、ただただ驚けばよい。

なぜなら、次の「第三部」から見ていくキリスト教の歴史では、この仏教の寛容性とは正反対の、驚くほどの非寛容性を見ることになるからだ。

病的なまでの非寛容性

ところで私は「第一部」で、ユング心理学における「補償」の概念を紹介した。そのさいにC・A・マイヤーの言葉を引用したのだが、じつは彼の言葉には、かなり長い“続き”があったのである。

この“続き”を含めたマイヤーの言葉を、私はあえて、この場に掲げたいと思う。次にくる「第三部」の序言として、あるいは「第二部と第三部との媒介の言葉」とするためにだ。なぜなら、その文章が、仏教とまさに対照的な「キリスト教の非寛容性」の病根を示唆しているからである。

仏教よりもはるかに病的な、キリスト教の徹底的な非寛容性——それはまるで、一人の精神病患者の“症状”のように見える。それだからこそ、精神科の医師でもあるマイヤーの言葉が、この場面では真実味をもって響くのである。

では、以下マイヤーの言葉を読んでいただこう。

——あらゆる一面性は、遅かれ早かれ無意識の方から、一面性に逆らう抵抗として現れてくる補償を求める。補償は〔それを受けた者を〕正常な範囲の中へとどめることが出

来る。

しかし〔皮肉なことに〕精神的に均衡のとれていない人間は、自分自身の無意識に逆らい、そのためにその補償的意味を受け入れることを拒絶してしまうであろう。

そうすることによって、彼は自分の一面性を致命的なまでにも強化することになり、換言すれば、彼は自分の無意識が治癒的意図を持って現れてくるのを見逃してしまうことになるであろう。

その結果、無意識の側からの圧力が増大し、その〔補償の〕内容はいっそう歪められた形で現れ、それを聞いたり、見たりできる方法は、ますます奇妙になってくる――

C・A・マイヤー『ユング心理学概説1・無意識の現れ』河合俊雄・森谷寛之訳より

第3部 キリスト教の完成と終末について

第1章 教会による「↓」の徹底

ルターは確かに、人間の行いが人間の救いに対して何程かの貢献をするということに対しては、潔癖すぎるくらい潔癖に、そういうあらゆる可能性を断ち切ろうとしたんです。

ルーテル教会の欠点で宗教改革の後起こってきたというのは、ありがたやの与市兵衛なんですね。

神様がおひとりで私たちの救いを完成してくださって、罪人は何もしないでいい、ありがたい、ありがたいと言ってじっと座っている。

百瀬文晃編『諸宗派のあかしするキリスト』ルーテル神学大学教授 徳善義和氏の講演記録より

（１）イエスの立ち位置

「↓」の代表的宗教

第二部で仏教を取り上げたのは、仏教が「↑」スタイルの代表的宗教だからである。

仏教徒は悟りによって意識段階を上昇させ、次第に神に近づく。そして最終的に訪れる「神と人間の合致」が「仏」「仏陀」である。この一連の流れが「人間の神化」であり、仏教という宗教に、本来的に備わっている思想的“形式”である。

それに対して、「↓」スタイルの代表的宗教は、やはり、我らがキリスト教ということになるだろう。

確認しておく、「↓」とは、「神からの恵みが、人間の次元まで降りてくること」が教義の柱となる、救済型の宗教のことである。端的に言って、そこでは「神が人間になる」ことすらある。イエス自身、「私が天から降ってきた」と言っているし、また「天から降ってきた者、すなわち人の子」とも言っている。

人の子となった神

人の子——イエスは自分のことを「人の子」と称した。じつに多くの場面で「人の子」は、福音書におけるイエスの自称名詞である。

そして、この人の子は「人の子となった神」と文章を補足するとき、その本質が初めて露になる。

つまりこれは「神の人間化」のシンボルなのだ。まさしく神は「人間になるために、マリアという人間の女性から、人間の子供として生まれること」を望んだのである。

そして、その実現こそが、イエス・キリストだった。

これをキリスト教的に「受肉」と言うが、同じことをパウロは次のように説明している。

「キリストは、神の身分でありながらも、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じものになりました」

そして、人の子として生まれた神イエスは、その神的な力によって、心貧しき者を富ませ、悲しんでいる者を慰め、病に苦しむ者を癒した。そして何より、十字架上の死によって、人間のあらゆる罪を許したのである。

これが神の恵みでなくて何だろう。まさに神は、人間の地平に降りてきて、そこで数多の恵みをまき散らしたのである。

とりわけ象徴的なのは『ヨハネによる福音書』に出てくる、イエスが弟子たちの足を洗う場面だろう。

そこでは、イエスの恵みの手は、弟子たちの足の裏までも届いた。つまり神の恵みの手は、人間たちの地平までも届いたのだった。

奇跡は一度きりか

神が人間となったイエスの生涯は、まさに人類史上の奇跡だった。そして、奇跡というものは、元来「滅多に起こらないもの」である。それについては私も認めよう。

しかしだ。だからといって、べつに「奇跡は一度きりしか起こらない」という決まりがある訳ではない。よって私は、声を大にして語りたいと思う、

「奇跡に回数制限はない。だから二度目の奇跡が起こっても一向に構わない」と。

これを当然の言葉として聞く者もいるだろうし、冒瀆的な言葉として耳にする者もいるだろう。一般的な日本人ならきっと前者であろうが、ことクリスチャンに限って言えば、必然的に後者である。

彼らは教会から「二度目の奇跡はない」と教え込まれている。イエスのような奇跡は、もう二度と起こらないのだ、と。これは、かなり強硬に押し付けられたドグマ（教義）である。しかし、試みに聖書学者に、

「では、奇跡は一度しか起こらないという、その言葉の根拠を示して下さい」

と問いかけてみたでしょう。すると、そのとき聖書学者は、脂汗を流して、さうとう答に窮することだろう。なにしろ、聖書のどこを探しても、その根拠となる文言などは見つからないからだ。

だから本来的には、イエスのような「受肉した神」は、再びこの世界に現れても、一向に構わないのである。

ところが、それが現実にならないよう、教会は聖書に、じつに巧妙で堅固なブロック（封印）を施した。しかも福音書（イエスの言行録）が成立した時点で、すでにそれが執り行われていたのである。

福音書のブランク

そのブロック、封印とは、福音書から、イエスの青年時代の記事がすっぽりと削除されていることである。西暦 451 年発布のカルケドン信条によれば、そもそもイエスは、「神性においても完全にいまし、人性においても完全にいます方。真に神、真に人」

である。つまり彼は、キリスト教の正統教義においても、その存在の一面において「完全なる人間」なのである。

そんなイエスには、当然「人間が神になるまでの悟りの過程」があったはずだ。むしろ、それが無いならば、イエスはもはや「人間」の名に値しないだろう。

だってそうではないか。完全なる人間（＝不完全な存在）が、生まれた時から悟って

いる訳はないのだから。

だとすれば、そこに「人間が神になるまでの悟りの過程」がないかぎり、イエスは、私たちと同じような「人間」であるとは、とてもではないが、自己紹介できないはずなのだ。

それこそ「この世に生を受けたときに、完全なる無明を宿命づけられた“人間”」であるとは。

無明とは、要するに愚かしさであり、無知のことである。その無明を課せられもせず、もし生まれたときから神に等しいというならばだ。そんなイエスは堂々と「神」とは名乗れても、堂々と「人間」とは、きっと名乗れはしまい。

とどのつまり、真に神、真に人である者は、必然的に、その人生のどこかに「人間が神になるまでの悟りの過程」を持たなければならないのである。人間として、上に述べたような無明を、人生のスタート地点とせざるを得ないならば、本当にどうしたって！

そしてこれは、言いかえれば、「彼は人生のどこかに『↑』の時期を持たなければならない」と言っているのと全く同じである。

幼年時代からのスキップ

30歳ぐらいで公の宗教家となったイエスの場合、その修行期間、つまり「↑」の期間は、彼の青年時代と重なっていると考えべきだろう。

ところがだ。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという四つの福音書の全てにおいて、その青年時代が、ものの見事にブランク（白紙）になっているのである。

そのためイエスは、幼年時代からスキップして、いきなり壮年期の「神に等しい人間」として現れることになる。壮年の、とてもではないが「真に人」とは言い難い神の人間として、突然現れるのである。

おかげで私たちは「イエスの『↑』を参考にして、第二のキリストになる」という奇跡を起こすことが、まったく出来なくなってしまった。

そしてまた「↑」が配置されるべき箇所が白紙になっていて、「人間＝神」の高みから、いきなり教えが説かれるとすればである。当然のことその教えは、もはや混ざり気なしの「↓」にしかならないだろう。とくにイエスの教えは、もともと「↓」の雰囲気濃厚なのだからなおさらだ。

かくして各福音書においては、このようなイエスが「人の子となった神」としての恵みをまき散らす。そして、その記述によって、キリスト教を「↓」の典型的宗教としていく。

それは、イエス自身が望んだことであるかどうかは分からない。しかし間違いなく、教会が望んだことではあっただろう。

（２）教会の時代

時代の推移

周知のとおり、イエスは十字架にかけられて死んだ。

弟子たちの信仰もそのとき死んだが、イエスの復活とともに、弟子たちの信仰も蘇った。そして、ここに信仰者たちの集いである「教会」が生まれる。

生前のイエスによる「愛、神の教え、許し」は、聖霊をとおして教会に受け継がれ、かくして教会は「イエスの代理人的組織」となった。よって、イエスなき時代にイエスに頼りたい者は、必然的に教会に頼るしかないことになる。

ペテロら、イエスの直弟子やパウロが生きていた頃には、教会においても、イエスのときと同様な「神的な力」が発揮されていたようだ。そこには、後世の脚色とは言い切れない「奇跡の記事」が散見されるからである。

しかし、殉教者たちの情熱が、キリスト教をローマの国教とし、ヨーロッパに中世が訪れるころになると、もはや奇跡の時代は過ぎ去っていた。教会人の愛は薄れ、みずみずしかった神の教えは、無味乾燥な神学と変わっていた。

こうなると教会は、神の奇跡を引き寄せる場ではなく「罪を悔いる者に対して、許しを与える場」としてのみ、機能することになる。

つまり奇跡ではなく、教会の儀式が、人々の罪を許すようになったのである。洗礼、告解、聖餐式（ミサ）といった儀式が、それに当たるだろう。

しかし、すでに奇跡を失っていた教会は、さらに愛や霊性や、心までも失っていく。残ったのは味気ない「形式」だけであり、要するに「許しの形式」だけが残ったのである。

そしてそれは、いわゆる「事効」が成立したとき、まさに決定的になったと言えよう。

事効の考え方

事効とは「資格と形式さえあれば、ミサの参加者には、必ず許しと救いがもたらされる」という考え方である。

そして、その考え方の帰結として、自然と「ミサの主催者が、いかなる人格の持ち主であろうと、それはミサの効力には、全く関係しない」ということになった。事効とはそういう教義なのである。

つまり、たとえどんな低俗な人間であっても、その人間が司祭や司教の資格を持ってさえいれば——かつ「決められた手順をちゃんと踏んで」ミサを行うならば——そこには必ず霊的な恵みが現れる、というのだ。

教会はそれを保障するという。何たる嘘くさい話！

だってそうではないか。私たちは日常的経験のなかで、制度としての資格を持っているのに、実質的には何の能力も持っていない人間によく出くわす。医療知識に乏しい医師、生徒に大切なことを教えられない教師、介護技術を持たない介護福祉士、本当にいろいろある。

また、どんなに素晴らしいインフラを作っても、どんなに効率的なスケジュールを立てても、それを利用、運営する者に能力がないならば、そこに「もともと予定していた計画」を現実化させるのは無理であることを、私たちは知っている。

要するに「資格と形式」というものは、現実を見つめれば見つめるほど、私たちに何物も保障してくれないものなのだ。

だが教会は、声高に「資格と形式さえあれば、それで必然的に救いがもたらされるのだ」と言う。これほど徹底した「許しの形式主義」、あるいは「形式的な許し」もないだろう。まったく、ここにどれほどの真実があるというのか。

人効の考え方

こうした考え方の真逆にあたる概念が、キリスト教神学では「人効」と呼ばれている。事効の真逆であるからには、こちらは「ミサの主催者の人格と霊性が、ミサの参加者に対する『救いの質』を左右する」という主張になる。

宗教が、先に挙げた医療、教育、介護よりも、より内面的なもの、霊的で人間的なものならば、こんなことは当たり前もいいところだ。高次の霊性と人格がないところに、霊的な救済など、もたらされるはずがない。

では、人効を成立させるために必要な、その「霊性と人格」は、どのように培われていくものなのだろうか。

これについては、ほかの何よりも、まず「悟りによって」と言うしかない。知識だけでも、人生経験だけでも足りない。霊的な人格を形成するためには、どうしても悟り（霊的認識）が必要なのだ。

したがって「人効」には、必然的に「↑」が潜在していることになる。言いかえれば、そこには「人間の神化」のベクトルが蔵されているのだ。

しかし教会は、その「↑」「人間の神化」を、事効の教義によってブロックしてしまった。先に見たように、「ミサそれ自体に効力が備わっているのだから、それを主催する人間の内面性（＝悟り）など、問題にする必要がない。

むしろ、それは不要なものである。資格と形式さえあれば、ミサの主催者が、いかなる人格の持ち主であろうと、ミサの参加者には、許しと救いがもたらされるのであるから」と言って。

こうしてキリスト教は、純粋なまでの形式主義に堕した。言わば、イエスが嫌った、あのパリサイ人の形式主義とそっくりになったのである。

（３）第二のキリストを生まないために

「↑」をブロックする理由

どうして教会は「事効」などという、干からびた形式主義を採用したのだろうか。

それについては、教会の持続的なシステム化など、いくつかの実務的な理由が考えられるだろう。だが、ここでは「第二のキリストを生まないために」という理由に、話を絞り込みたい。

してみると、既に述べたように「人効」には悟りの要素があり、他方の「事効」には、悟りに結びつくものが全くなかった。だから当然、教会は「事効」のほうを採用しない訳にはいかなかった。

なにしろ、もしも教義のなかに「↑」の要素を残しておけば、それは結局、信徒が悟りによって神に近づく可能性を。そして下手をすれば、その信徒が『神＝人間』のステージに達する可能性をも、残すことになるのだ。

それは換言すれば「うまくいけば、信徒のなかに、第二のキリストが誕生する」ということである。

第二のキリスト——そんな者が現れたら、教会はどうなるだろう？

疑いようもなく教会は、それまでの「唯一無二にして絶対の立場」を失ってしまうだろう。そうして「教会」と「第二のキリスト」という形で、信徒のなかで、信仰対象の並列、相対化が始まってしまうだろう。

一回性を死守する教会

そもそも教会の論理では、神の受肉（神の人間化）は、イエスによって“ただ一度だけ”行われたことである。

それゆえ信徒の救済は、イエスという個人か、イエスの死後、彼の権限を引き継いだところの「教会」によってしか、実行できない事になっている。

そして言うまでもなく、いまやイエスは十字架にかかって死んでしまっている。となれば、救いを求める信徒は“絶対に”教会に頼らなければならない。教会以外の頼りどころは“絶対に”ない。そういうことになる。つまり、
「教会を守るためには、逆に、〔神の〕人間化と救済の業の一回性を精力的に強調し〔なければならぬ〕」のである（ユング『ヨブへの答え』より）。

そして、まさにその通りのことを、歴史的証言として、殉教者キプリアヌスは言い遺しているのだ。

「唯一の神が存在し、キリストは一つであり、一つの教会があり、主の言によって岩の上に建てられた唯一の椅子〔であるところの教皇座〕がある」

したがって「教会の外に救済はない」と。(藤代泰三『キリスト教史』より)

それだからこそ教会は「絶対無二の権力者」として、キリスト教徒から祭り上げられることになったのである。

教会が恐れる事態

だというのに、「人効」を認めてしまったら——「↑」の力が「第二のキリスト」を作ってしまったら——それにより、教会以外に「救済権限の保有者」を作ってしまったとしたら——そのとき、教会はどうなってしまうだろう。

もちろん、まずは先に見たような「教会」と「第二のキリスト」という形の、並列、相対化が起る。そして次に、おそらく信徒たちの耳目は、第二のキリストのほうに、より熱く注がれることになるだろう。

なぜなら、その第二のキリストの登場には、きっと教会がすでに失って久しい「奇跡」が伴うはずだからだ。そもそも奇跡がイエス・キリストをつくり、奇跡がキリスト教をつくったのだ。第二のキリストによる奇跡は、まさしく、その“原点”を思い出させてくれるだろう。

こうなると教会は、だいぶ分が悪い。というより、そうならしまえば、教会のレーゾンデートル（存在理由）などは、すぐさま霧散してしまう。それと一緒に、彼らの絶対的権力など、跡形もなく消え去ってしまうのである。すなわち、「今ここに元祖（キリスト）がいるではないか。なのに、なぜ後継者（教会）が必要なのか」と言われて。

したがって「間違っても、そんな事態を招いてはならない」というのが教会側の本音となるだろう。なにせ教会は、もうすでに、現状として、絶対的な権力を手にしてしまっているのだ。今さら、それを手放せようはずもない。

ドナートゥスの人効

これまで抽象的な形で、教会の「事効」と「人効」について論じてきたが、ここで教会の具体的な史実に目を向けてみよう。

まず先に「人効」について見てみよう。これは「ミサの主催者の人格と霊性が、ミサの参加者に対する“救いの質”を左右する」という思想だった。

これは宗教的には正論であるが、前節で見たような理由により、教会にとっては、異端思想に他ならない。

異端思想とは、教会にとって都合の悪い、それゆえ教会によって否定されるべき思想のことである。

歴史的に眺めれば、この「人効」という異端思想を最初に主張したのは、四世紀はじ

め頃に現れたドナートゥスだった。彼率いるドナーティスト派は、四世紀から八世紀にかけて、次のような経緯を辿っている。

——〔ドナーティスト派は〕ローマ・カトリック教会からの北アフリカの教会の分派で〔あった。彼らは〕ディオクレティアヌスの迫害の時に背教（キリスト教を捨てること）したことのある監督による監督叙任は無効であるとした厳格派である——

一度信仰を捨てたような者が、教会の監督に収まるのはおかしい、そうドナーティスト派は考えた。たとえ、そのような背教者が監督の地位に就けたとしても、少なくとも彼らに、霊的な影響力ばかりは備わることあるまい、と。ここに人効の原点がある。

しかし彼らドナーティスト派の主張は、正統派には、まったく受け入れてもらえなかった。

——〔正統派を代表する〕アウグスティヌスは、礼典の真の執行者はキリストであるから、教職者の人格は礼典の効力に影響を与えないといった（＝事効の原点）。

この〔ドナートゥス派という〕分派は四世紀から五世紀にわたって北アフリカで盛んであったが、ローマ帝国の弾圧によってその勢力は弱まり、七世紀から八世紀にサラセン人によって滅ぼされた」——

上とともに、藤代泰三『キリスト教史』より

グレゴリウス改革

それから数百年後に、ドナートゥスの主張を再び、積極的に取り上げる者が現れる。しかも今回は、それが教会のトップである「教皇」だということだから驚く。

その教皇とは、かの「カノッサの屈辱」でも有名な、グレゴリウス7世だった。

彼は教会のトップとして、腐敗した教会組織を改革しようとした。そして、その批判材料の一つとして、いにしへの「人効」を主張したのである。

振り返ってみると——「事効」とは、「教会が与える資格を持ってさえいれば、そのミサ主催者のもとで、信徒の救いは自動的に成立する」という内容である。

むろんこの「資格」とは名目上のものでしかない。したがって、これを絶対の教義にしてしまえば、聖職者はいかなる“中身”も問われないことになる。

つまり聖職者たちは、いまや自身のうちに、どんな人格を形成しても、まったく差し支えないのである。それこそ、どんなに醜い人格をつくっても、どんなに腐った人格をつくっても構わないのだ。

そして当然、そうした醜悪な人格は、彼らの外的な行動となって顕れてくる。つまり、人々の目に見えるものになる。

もともとキリスト教の聖職者たちは、絶対的なまでの権力をもった特権階級だ。したがって、彼らの行動の「腐敗ぶり」には、まったく歯止めがかからなかった。その行き

すぎた行状について、インノケンティウス3世は次のような言葉を残している。

——彼らは貪欲の奴隷であり、贈物を喜び、名誉を求め、邪悪な者を贈物のゆえに正しいと宣告し、最も貧しい者からその権利を奪う——

藤代泰三『キリスト教史』より

まさに宗教的な惨状とっていい有様である。グレゴリウス7世は、この惨状を「人効」の教義によって、なんとか是正しようとしたのである。

内部が変わらず外部が変わる

だが、それが実を結んだかどうかは、はなはだ怪しいところである。すでに腐敗しきっている聖職者たちが、グレゴリウス7世から、「その腐敗に歯止めをかけよ。ミサの主催者の人格と霊性が、ミサの参加者に対する“救いの質”を左右するのだから」

と、人効の教義を教えられたところで、いまさら更生するのは難しいに決まっているからだ。

しかも事効は、偉大なる「教父アウグスティヌス」以来の正統教義なのである。これを異端思想扱いされた「人効」で覆すのは困難を極めた。

むしろ、聖職者たちにとって明らかなのは「グレゴリウス7世は、自分たちにとって、まことに具合の悪い存在（敵）だ」ということであろう。

彼らとしては、さすがに面と向かって、教皇を異端者扱いすることは出来なかった。

そうしたいのは山々だったろうが、相手は、自分たちが属している教会制度のトップである。いくら何でも、そこまでは出来なかった。

だが彼らが、グレゴリウス7世の言う更生案を、素直に受け入れることは、なおのこと「出来なかった」のである。

むしろ、このようなグレゴリウス7世の改革は、教会の外部に「異端者集団」を作り上げた。

つまり教会内部が変わらなかったため、その代わりに、教会の外部に、教会の腐敗に対する批判勢力が形成されたのである。

むろん「異端者」という言葉は聞こえが悪いだろう。

しかし、ここで言う異端者とは、単純に「腐敗した教会にとって都合の悪い相手」というふうに思えばよい。異端と呼ばれたからといって、それだけで彼らが「宗教的な悪者」のイメージを抱かれるのは、あまりにも気の毒だからである。

さて、その異端者集団の中心となったのが、いわゆる「カタリ派」である。彼らはグレゴリウス改革に勢いづけられ、教会の外部から、教会のありかたを批判した。

人効のシンボリック存在

カタリとは、ギリシア語の「純粋な」に由来する言葉である。

そうした純粋なカタリ派には「完徳者」と呼ばれるリーダーたちが存在した。それは教会の聖職者たちとは比べ物にならないほどの、宗教的誠心に溢れた人たちであった。

禁欲生活によって高められた、彼ら完徳者の精神は、ある意味「人効」のシンボルと言えるだろう。

少なくともカタリ派では「宗教的な徳を持った者だけが、信徒たちの上に立つことができる」という人効的なスタイルが守られていた。

一方の教会側に目を向けてみれば、すでにグレゴリウス7世は世を去り、彼のグレゴリウス改革も過去のものとなっていた。

そのため腐敗した本性が剥き出しになった聖職者たちにとって、カタリ派ぐらい目障りなものはなかった。なにしろカタリ派では、教会の事効的組織とは、まるきり逆をいく組織運営が「良好に」為されていたのだから。

しかも、それに対して民衆の支持も集まってきているという。これでは教会側としては、まさに面目丸つぶれと言うほかない。

そこで教会は、この目障りな相手を撲滅させるために、かの悪名高き「アルビジョア十字軍」を編成したのだった。

アルビジョア十字軍

カタリ派が多く存在したのは、フランスのアルビ地方だった。アルビジョア十字軍は、このアルビ地方に進軍し、そこで多くのカタリ派信者を殺戮した。

——十字軍の兵士たちは大虐殺をおこなった。カタリ派であるかいなかを問わず、ペジェ（カタリ派の拠点の一つ）の全住民約三万人が殺害され、町は二日間燃え続けた。

この虐殺のさい、異端とカトリックをどう見分けたらよいのかという問いにたいして、十字軍の指導者の一人（中略）は、『すべてを殺せ。神は神のものを知りたまう』と答えたという——

甚野尚志『中世の異端者たち』より

上記の文章を読むだけでも、実に酸鼻を極めた情景が浮かんでくる。そして、この残酷なジェノサイド（大量虐殺）によって分かるのは、キリスト教会にとって「↑」が、どれほど危険であるか。教会にとって、いかに邪魔なものであるか、ということだ。

そう、教会は自分たちの「↓」を守るためならば、いくらでも、眼前に現出させることが出来たのである。もしもイエスが見たなら、悲しみの涙を流すに違いない、世にもおぞましい修羅場を。

(4) ついに徹底された「↓」のベクトル

自由意志と奴隷意志

このようなカトリックの腐敗は、プロテスタント陣営から反抗（プロテスト）を突きつけられることによって、かなり角を矯められることになる。

畢竟、ルターやカルヴァンの反対運動をして、これを「異端」と断じて切り捨てるには、かかるプロテスタントの宗教的エネルギーは、あまりにも大きくなりすぎていた。

ところがである。もともと作為も悪意もなかった、彼らプロテスタントの“純粋性”が、皮肉にも「キリスト教における『↓』のさらなる徹底」という事態を引き寄せることになる。つまりこの頃を境にして、事態はさらにシリアスで、さらに徹底したものになっていったのである。

そのころ、プロテスタントの雄であるルターは『奴隷意志論』という著作を発表した。これは先んじて出版された、エラスムスの『自由意志論』に対抗したものである。

エラスムスとルターの論戦

エラスムスは、キリスト教的救済に——全面的にはではないが——人間の意志も参画することを説いた。つまり人間の意志には善なるものも含まれており、その善が、人間を「↑」の方向へと昇らせる。そしてそれが、ある程度まで人間を「神からの救い」に接近させる、と主張したのである。エラスムスは言っている。

——私は〈自由意志〉を、そういう力によって、人間が、永遠の救いへと導くような事がらへ自分自身を適応させたり、あるいはそのようなものから身をひるがえしたりする、人間の意志と力と考えているのである。

…私たちがそれによって判断するものである〔自由意志という〕魂の力は、…罪によっておぼろにされただけであって、消滅せしめられたのではない——

金子晴勇『人間と歴史』より

しかしルターは『奴隷意志論』によって、これをキッパリと否定する、
「人間の意志は、悪なるものしか志向できない。人間の意識は少しも上昇しない。ゆえに救いは100%、神からの恩寵によって行われるしかない」と言って。

——神の恩恵抜きの〈自由意志〉は、全く自由ではなく、むしろ単独では自己を善に向けえないのであるから、自らをかええないようにとらわれた悪の奴隷である、ということになる。

〈自由意志〉に何が帰せられるというのであろうか。いや無以外の何が〈自由意志〉に残されているのか。実際、何もないではないか——

金子晴勇『人間と歴史』より

つまり、ルターの『奴隷意志論』こそは、人間がもともと持っている「↑」を、完全に排除し、ついに人間の意志を、奴隷の地位にまで貶めた、記念碑的作品なのである。

神秘主義者の真理

いや、それが真理である局面が、本物の宗教者に訪れることは、私も知っているのだ。神秘体験がもたらされる、その瞬間のことだ。私はこれを、第二福音書の座標 8, 9 で「恩寵の原理」と題して叙述している。

そのとき人は、罪の意識に覆い尽くされて、奴隷のように無力になりきる。そして、その哀れさ、無力さゆえにこそ、神からの抱擁（救済）を引き寄せることになるのである。

そう、無力さこそは、神から救済を引きだす、最重要の誘引条件である。

それはまるで、無力だからこそ愛しい嬰兒を、母親が、その柔らかな胸のうちに抱きしめるように。外界で生きる力を持たない胎児を、子宮が包み込まない訳にはいかないように。

神秘体験者であるルターには、その局面の真理が、ほかのどんな真実よりも大切なものとして感じられたのだろう。だからこそ、

「人は、自分を無力な奴隷として感じ切った時にこそ、神の救済に出会えるのだ。これがまさにキリスト教の本質である。自分の経験上、これよりも確かで大事な真理はない。

だから私に限らず、すべてのクリスチャンは『人間の意志が、何か善いことを志向できる』などとは、決して考えないほうがいいのだ」

という結論に辿り着いたのだと思われる。

トリエント公会議という結実

しかし宗教思想的に俯瞰してみれば、それは飽くまでも「特殊な局面における、特殊な真理」に過ぎない。

それは神秘主義者には分からないことだが、神秘主義以上の真理に到達すれば、否応なしに分かることだ。つまり、その局面的特殊性が、疑いようもない事実として理解されるのである。

なのに、その特殊なものを、あまねく「全人類、全人間性を貫く普遍的真理」であると定義したらどうなるか。特殊な真理を、すべての人間と、すべての人生に当てはめたらどうなるか。

答えは明白だ。世界と人間性は、どうしたって歪まされずにはおかれない。

そして確かに、キリスト教世界は歪んだ。

すなわち、キリスト教の「↓」は、度を越して徹底され、先鋭化されたのである。僅かばかりの「↑」も期待できない「精神的奴隷」や「精神的胎児」だけが、キリスト信徒の優等生とされるほどにも。

現実問題、精神的な奴隷や、精神的な胎児に、自由意志などあろうはずもない。だから彼らにとっての救いは、神からの恵みだけに委ねられている。そこには、まさに徹底されつくして歪んでしまった「↓」の姿がある。

そして歴史的に見れば、ルターが辿り着いた結論である、この、「人間の意志は、悪なるものしか志向できない。人間の意識は少しも上昇しない。ゆえに救いは100%、神からの恩寵によって行われるしかない」

という思想は、プロテスタント勢力どころか、カトリックの教義にまで影響を及ぼしたのである。

というのも、反動宗教改革とも呼ばれる、カトリックの「トリエント公会議」において、ルターの教説が、カトリックの教義として、そのまま取り入れられたからである。まさしくルターの言うとおりである、と。

つまり、仲が悪い姉弟と呼ばれる「カトリックとプロテスタント」は、こと「↓」の徹底という点では、図らずも仲良く、キリスト教世界の意思統一を為し遂げたのである。

宗教的完成を求めるエネルギー

それゆえキリスト教は、今もって、宗教的に未完成のままでいる。

そこでは「↓」と「↑」のバランスは、全く均整をとっておらず、そのスタイルは、大きく「↓」のほうに傾いている。

親鸞以降の仏教と比べれば、キリスト教の宗教性をして、これを「あまりにも大きく歪んでいる」と酷評することも出来るだろう。

だが皮肉なことに、その歪みのぶんだけ、キリスト教の「完成を求めるエネルギー」は巨大なままで残されている。そうした切実なるエネルギーが、クリスチャンの無意識下に、相当量蓄積されている。

そして、そのエネルギーは、自分が解放される時が来るのを、今か今かと待ちわびているのである。

以前に流行した『ダヴィンチ・コード』などは、そのエネルギーが、ほんの少しだけ漏れ零れた一例と考えられるかもしれない。

あの作品は「教会史によって隠された、人間としてのイエス」の秘密開示というテーマを持っていた。そのため、この「人間としてのイエス」の部分をはけ口にして、そこから「人間の神化」「↑」のエネルギーが、少しばかり溢れ出てしまったのだ。

そして、あの程度の漏洩であっても、かの『ダヴィンチ・コード』は、見事なまでの世界的ブームとなりえたのである。史実として見れば、それこそ、真偽のほど定かでない作品であるのに。

となれば——推察するに——クリスチャンの無意識下にある「宗教的完成を求めるエネルギー」の巨大さには、きっと恐るべきものがあるのだろう。

予想される「完成と終末」

しかし、その巨大なエネルギーを放出させるための通路、水路は、未だに存在していない。それどころか、まったく建設予定も、整備予定も立っていない、というのがキリスト教の現状だ。

そのため「宗教的完成を求めるエネルギー」は、早晩、反平和的に、決壊したダムのように溢れ出すことが予想される。

つまり、そのエネルギーは、きわめてドラマティックに、ほとんど暴力的にキリスト教を「完成させる」ことになるのだ。

最悪の場合、バチカンや、プロテスタントの教会が、襲撃されるような事もあるかもしれない。その教えの歪曲に耐えられなくなった信徒たちによってである。

いや、もちろん「誰かが水路をつくる」となれば、話は別だが。

すなわち誰かが「↓」と「↑」の両方のベクトルを、完全に手に入れた状態で登場すればよい。そして彼が「偏向して歪んだベクトルの補正の仕方」を、クリスチャンたちに教えればよいのである。

とはいえ、それですら大いにドラマティックにはなるであろう。明らかにそれは、教会が忌み嫌う「第二のキリスト」の登場を意味しているのだから。

しかも、キリスト教会に限定しなくとも、歴史上において、人々がすんなりと「本物の宗教家」を受け容れた試しはないのである。預言者も救世主も、常に無視と迫害を受けたのである。よって、そこには間違いなく、一波乱も二波乱もあるはずだ。

少なくとも、その偏向しきった性質上、キリスト教には——仏教のところで見たような——あの淡く儚く、静かに炎が消えるような終末は、到底迎えることが出来ないのである。

再臨のキリストによる福音書 1・1

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
